



TITLE:

最近の"天界"を讀みて

AUTHOR(S):

T. O.

CITATION:

T. O.. 最近の"天界"を讀みて. 天界 1933, 14(151): 31-32

ISSUE DATE:

1933-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165433>

RIGHT:

最近の“天界”を讀みて

T. O. 生

颱風氣節に入つて虫の聲も涼しくなり、星も次第に美しくなつた様である。大空にひかれて“天界”をひつくり返へして見る氣になる。ページをめくる。なんと論文の多い事よ！

筆者がその昔、天文同好會員の末席に加つてからかれこれ十年にもなろうとして居るから、“天界”が向上したのもあたり前かも知れぬ。とにかく難しい記事が増して來た。

流星の論文が現はれるかと思ふと、黄道光の觀測記事がある。“天界”は實に天文學界の學術雜誌としても立派なものである。

然し、なんだか筆者は昔の“天界”が戀しくてならない。山本先生の外遊日記が出て居た“天界”，ペン畫が入つた荒木先生の記事が載つた頃の“天界”がなつかしい。

さうしたフニキからぐんぐんひき込まれて行つた興奮を憶ひ起す。そして、現在の筆者は、相もかはらぬアマチュアである。

素人は専門家でないことは言はないでもよい事だらう。又、觀測の結果を發表する愉快さも觀測をやる人にとつて忘れられないことである。

けれども、觀測のデータが頁を開くとピンピンと眼に飛び込むのには、いさゝか閉口である。

實驗室から歸つて、ノンビリと机に向つて“天界”を開く。と、そこには亦學術の報告書が待機の姿勢にある。一寸ウンザリせざるを得ない。なんだか「切り込む」スキはないかと、血眼で讀まねば氣がすまない様な感じである。

ロクロク讀みもしないで本箱に投げ込むのは、論文の筆者に氣の毒な様で、又、讀めば肩がこる。一寸厄介である。

銀行や會社で一日事務をとり、歸つてノンビリと“天界”を開かうと思ふ人達も恐らく同感だらう。

その昔からの會員は、恐らく専門家の領土に馬を進められたらう。誠に結

構なことであるが、大多數の人は十年一日の如く星の美を愛するアマチュアであり、續々入會する人も亦アマチュアが多からう。

かう考へて行くと、“天界”は、會員の大勢にかなり無關係に、向上の一路をとつてゐるのではなからうか？。

然し、何も研究報告や論文紹介をクナすものではない。大いに必要であり、益々盛大にすべきだらう。けれどもアマチュア、文字どりの素人は、カロリ表のついた栄養價値の充分ある、而も舌ざはりのあまりよくない料理を強ひられる様な氣がする。

素人は天文學者の生活が知りたい。一體、天文臺では誰が毎日どんな事をやつてゐるのだらう？。變光星の事はどの本を讀んだらわかるだらうか？。小さな望遠鏡が欲しいが、どれがよいのだらう、澤山廣告には出てゐるが？。双眼鏡を持つてゐるが、どの星座を見たら美しい星が見えるだらうか？。『緯度變化』で、何の事だらう？。正確に東西南北を知るには、どうしたらよいだらうか？。……

素人の頭には疑問が百出する。その昔の“天界”はその様なテーマが面白く取扱つてあつた。然し何もそれは“天界”の義務ではない！？

たゞ素人の願は“天界”が學術の報告書になつてしまはぬ様、亦何時でも親しみをもつて頁を開き得る様、難しい問題かも知れないが、最近の“天界”を續んで、皆様に賛成してゐたゞきたいと思ふことを、くだくだと書き綴つて見た。妄言多謝。

一素人拜

編者曰く――

此の「T.O.生」氏の文は、吾々の心をデングリ返らせた！と同時に、かねて「天界」の編輯に一大革新を遂行しなければならないと思つてゐた吾々をして、『愈々實行だ』と決心せしめたものであつた。そして、春以來いろいろと考へてゐた形に、思ひ切り、改めて、こゝに御目見えする次第である。讀者諸氏からなにぶんの御批評と御忠言とを得、又、よろしく御宣傳を願ひたい。